韓国『千字文』書誌

李　　孝善

Ⅰ．序論

1．研究の背景及び目的

漢字を学ぼうとする人なら、誰でも一度は『千字文』という書物に接したことがあるはずだ。『千字文』はかつての代表的な識字教科書で、これまで韓国でもずっと大きな役割を果たしてきた。昔の韓国の寺子屋ではどこでも子どもたちが『千字文』を朗唱する声を聞くことができたし、寺子屋という単語を聞けば、すぐに『千字文』を覚えるたくさんの子供たちが連想されるほどだ。さらにいまでは『魔法千字文』(1) とか『太極千字文』(2) という名前のアニメやミュージカル、漫画冊子などがたくさん登場し、子供たちが親しみをもって接することができるようにと内容が改良され、学ぶための楽しさの要素も加えられて、今日でも人気ある啓蒙用教材として広く使われている。

中国から韓国に『千字文』が伝わった時期は明確ではないが、韓国から日本に『千字文』を伝えた記録が、『古事記』の「中巻」に残っている。

> 此之御世、定賜海部、山部、山守部、伊勢部也。亦作劒池。亦新羅人參渡來。是以建内宿禰命引率、爲役之堤池而、作百濟池。亦百濟國主照古王、以牡馬壹疋、牝馬壹疋、付阿知吉師以貢上（此阿知吉師者、阿直史等之祖）。亦貢上横刀及大鏡。又科賜百濟國、若有賢人者貢上。故、受命以貢上人、名和邇吉師。即論語十卷、千字文一卷、幷十一卷、付是人即貢進（此和邇吉師者文首等祖）。又貢上手人韓鍛、名卓素、亦吳服西素二人也。《古事記》< 中巻・應神天皇 >

> この御世に、海部、山部、山守部、伊勢部を定めたまひき。また剣池を作りき。また新羅人参渡り来つ。ここをもちて建内宿禰命引き率て、堤池に役ちて、百済池を作りき。また百済の国主照古王、牡馬壱疋、牝馬壱疋を阿知吉師に付けて貢上りき。（この阿知吉師は阿直史等の祖。）また横刀また大鏡を貢上りき。また百済国に、「もし賢しき人あらば貢上れ。」と

科せたまひき。故、命を受けて貢上れる人、名は和邇吉師。すなはち論語十巻、千字文一巻、併せて十一巻をこの人に付けてすなはち貢進りき。（この和爾吉師は文首等の祖。）また手人韓鍛、名は卓素、また呉服の西素二人を貢上りき。（『古事記』p.145、倉野憲司校注）

和邇吉師は王仁の日本における呼称である。上のように、『古事記』においては百済が日本に『論語』10 冊と『千字文』1 冊を伝えたと記録されている。これに対して韓国の学者李勳鍾は「我が国で成立した千字文型教材の探究」(3) の序言で、百済が日本に伝えた『千字文』は周興嗣によるオリジナルの『千字文』ではないという論議に触れて、日本の学者尾形裕康の論文を引用している。

漢学に心入たらむものの、新に千字二千字ばかりの文作らむは、はなはだかたきわざにはあらざるめり、されば王仁が持參れるは誰か作りたりしにもあれ、そのかみ百濟にて世にありし千字文なりと心得てありぬべし”(4)

尾形の見解によれば、それは百済で編まれた『千字文』という。いっぽう韓国の学者林東錫は「千字文の源流内容及び韓国での発展状況考察（千字文의 源流，内容 및 韓國에서의 發展 상황考察）」(5) で、百済の王仁が日本に伝えた『千字文』は魏の鍾繇の『千字文』(6) であると推定している。その根拠として、百済が日本に『千字文』を伝えた時期が百済の近肖古王（346―375）の時代と推定されるのに対して、梁の武帝が周興嗣に命じて『千字文』を完成させたのは 502―549 年と推定され、この二つが時期的に 200 年も隔たっており、百済が日本に伝えた『千字文』は周興嗣によるオリジナルの『千字文』とは考えられず、時期的に見て魏の太傅鍾繇が作った『千字文』である可能性が大きいと、林東錫は推測する。

しかし一般的なものだけでも 5000 千を越える大量の漢字の中から 1000 字を選び、それを文章にまとめるのは、漢字学研究に従事する者なら誰しも挑んでみたい作業だと考えられる。それゆえ過去に韓国でも数十種類の『千字文』が作られたわけで、百済から日本に伝えられた『千字文』も、百済で作られた『千字文』である可能性が考えられる。

本論文はそのような可能性にもとづいて、韓国で韓国人によって著述された各種の『千字文』について比較考証しようとするものである。

周興嗣の『千字文』は、中国で中国人によって著されたものであるから、どうしてもそこに中華主義的色彩が濃く入りこみ、中国中心の思想を展開してしまいがちであり、そのため韓国の子どもたちの教育にそのまま適用しがたい面が多く、また学習面においても若干の困難がある。このような問題点が、過去にも具体的に、朝鮮時代の崔世珍（1468-1542）による『訓蒙字會』(7) の「引」に述べられている。

“千字、梁朝散騎常侍周興嗣所撰也。摘取故事、排比爲文則善矣。其在童稚之習、僅得學字

而已、安能識察故事屬文之義乎？……今之教童稚者習千字類合。以至讀遍經史諸書、只解其字、不解其物。”(8)

千字文は 梁国の散騎常侍の 周興嗣が 編纂したもので、故事を取って対句を合わせて文章にしたもので、童蒙は単に漢字を學ぶだけで、どうして故事が理解でき、文章をつづることができようか。今の子供たちが千字の種類を学んだ後に 経史諸書をあまねく読むようになれば、文字は理解できるが事物は理解することができないだろう。

崔世珍は上のように、『千字文』は韓国の子どもたちに漢字を教えるためにふさわしい教材ではないと主張する。もしそうであれば、韓国では周興嗣の『千字文』をかつてどのように受容し、どのように啓蒙教材として使ってきたのか、また韓国の実情にふさわしい『千字文』とはどれであり、それがどんな目的に使われたのかなどについて、研究の必要が大いにある。

本論文ではさらに、韓国での『千字文』に使われた1000種の漢字にはどのような文字が使われたのかについても考察を加えたい。この考察を通じて、かつての寺子屋で最初に学ぶ啓蒙的教材として『千字文』が適当であったか否かを検討し、それを通じて今後の教材開発と識字教育の方向を提示することができるからである。

2. 研究対象及び方法

筆者が収集した韓国で作られた『千字文』種類は全部で36種類あるが、それ以外の未見のものもさらに何種類かあることが予想される。しかしそのように多様な『千字文』が存在することとは別に、韓国における『千字文』そのものに関する研究はまだ初歩的水準にあり、大多数の『千字文』関連研究はすべて周興嗣撰述の『千字文』研究か、その版本的研究が中心である。

それに対して本研究では、韓国で韓国人によって編纂された各種『千字文』の中で、題目に「千字」とはっきり明示したもの、及び字数が1000字前後のものを研究対象にする。具体的にはまず対象を時代ごとに区分し、データベースソフトAccessを活用して、36種の『千字文』について、ユニコード中心に漢字処理をおこないながらデータベースを構築する。ユニコードは中国の『千字文』との比較や韓国の常用漢字との比較の面において、きわめて有効に機能するからである。

第1章は前書きとして、研究の背景と目的、及び研究対象と方法を敍述する。

第2章は『千字文』の発生と、韓国でどのように発展したのかを探求してその価値を考察する。

第3章では各種の『千字文』を時代ごとに分析し、周興嗣『千字文』には使われていない漢字を抽出して、それぞれの『千字文』における用字の特徴を把握する。

次に4章においては、韓国で著述された『千字文』と、教育省が指定する韓国常用漢字1800字と比較し、漢字学習教材として有効に機能するかどうかという面を中心に韓国の『千字文』と常用漢字1800字の関係を考察する。この比較分析を通じて、多様な韓国『千字文』の特徴と共通点が明確になり、これからの漢字教育に対する新しい指標と方向を提示することができるであ

ろう。

Ⅱ.『千字文』の誕生と韓国での発展

1.『千字文』の誕生

周興嗣『千字文』はよく知られているように、南朝梁の武帝（502-549）が王子たちに文字を学ばせるため、殷鉄石の鍾王書中から1000字を重複しないように抜き出して韻文にまとめよとの命を受けて作られたものである。周興嗣がそれを一晩で作ったところ頭髪が真っ白になったことから、また「白首文」とも呼ばれる。この伝説は韋絢の『劉賓客嘉話録』と『太平広記』に載せられて、広く知られるようになった。(9)

2. 韓国での発展

『千字文』が韓国に伝来した時期は明確にはわからない。しかし朝鮮時代の韓国で『千字文』を直接刊行して使った記録が残っている。

『朝鮮王朝実録』の「世宗7年」（1425）に『千字文』刊行に関する記録があり(10)、原文に釈音を施して刊行されたのは、桓祖8年（1575）に光州で刊行された『千字文』が最初である。これらはいずれも周興嗣によるオリジナルの『千字文』であり、この記録から見て、朝鮮時代の韓国において周興嗣の『千字文』が普及していたという事実を見て取れる。(11)

朝鮮時代には周興嗣の『千字文』以外にも、啓蒙識字教材の開発が盛んであったと考えられるが、それに関する資料や記録は伝わっていない。今に伝わっている主な啓蒙識字教材には、崔世珍の『訓蒙字會』、『新増類合』(12)のような字書と『啓蒙編』、『童蒙先習』(13)、『擊蒙要訣』(14)、『推句』、『四字小學』、『海東續小學』などがある。そして中国の識字教材の代表的な「三百千」(15)のうちの一つである『三字經』が刊行されたこともあるが、『千字文』ほど絶対的な地位を持つことはできなかった。

中国の『千字文』が韓国で早くに普及し、それが現在まで使われ続けている理由を分析すれば、次の三つのことが考えられる。

第一に、寺子屋の盛行とともに『千字文』が広範囲に普及した。高麗時代から朝鮮時代まで、寺子屋は一貫して継続的に発展した民間教育機関で、それは新教育が施行されるまではもっとも普遍的に存在した教育機関であった。その寺子屋で学童たちが一番はじめに接触する基礎教材が『千字文』である。ほとんどすべての寺子屋では『千字文』を基本教材として、それを訓読することをもっとも基本においた。とりわけ朝鮮時代に入ってから寺子屋教育がさかんにおこなわれたから、それにつれて『千字文』の普及が一層拡大した。(16)

第二には、光州本『千字文』釈音本が大きな働きをしている。光州本『千字文』にはハングルによる釈音が加えられており、このハングル釈音は『千字文』を理解するための重要な手段であるとともに、ハングルを学ぶ手段でもあった。ハングルによる釈音によって原文が朗読しやすく

なるから、これによって学童が自然に漢字を覚えるという学習形態が進行された。このような学習が効果的なのかどうかはわからないが、釈音本がたくさん存在することから見て、『千字文』はハングル釈音と互いに共存しながら韓国で広く普及したと考えられる。

第三に『石峯千字文』の存在がある。『石峯千字文』は名筆家として知られる韓石峯（1543-1605）[17] が王命 [18] を受けて、楷書体で書きあげたものである。書道に関心のある人々は皆これによって漢字を練習し、書の研鑽に励んだ。漢字を学ぼうとする者は、釈音が加えられた『千字文』で自習し、さらに『石峯千字文』で書道を学習した。[19] 現在までにたくさんの『千字文』が刊行されているのはそのためにほかならない。[20]

3. 韓国『千字文』の価値

上述のごとく、中国の『千字文』が韓国に伝来してから後、韓国なりの方式で周興嗣『千字文』に釈音をつけて刊行して教育に使ったし、さらには寺子屋の塾長が学童たちにもっと優れた教育をするために、自分で直接『千字文』に類する教材を作った。

この状態が継続してゆく過程において、韓国の教育者たちは韓国の実情に合わせた各種『千字文』を重要視し、その著述がますます増えるようになっていった。『千字文』は基本的な啓蒙識字教材であるだけでなく、同時に時代ごとの教育観や価値観なども分かる重要な資料であり、あわせてそれぞれの時代における識字教育の基本的な状況も見て取れる。中国の『千字文』に親しんでいる現在の私たちにとっても、それは私たちの先祖が創意工夫をこらした面をより明確に理解できる著述としての価値を持っている。韓国で著述された『千字文』の中の半数近くは、大字で漢字を書き、さらに小字で漢字の音と訓を韓国語で表記しており、この事実から、『千字文』が漢字教育のためだけではなく、国語教育の面でも重要な教材として使われてきたものであることがわかる。[21]

韓国で『千字文』が普及してゆく背景において、つねに漢字教育と国語教育が共存しておこなわれてきた。韓国で著述された各種の『千字文』は、国語教育とも密接な関連があり、また地方ごとに異なる釈音表記方式は、方言研究の面でも非常に重要な資料としての価値を持っている。

Ⅲ. 歴代韓国『千字文』類用字分析

1. 朝鮮時代の各種『千字文』

朝鮮時代に韓国で著述された『千字文』には『萬古千字文』、『續千字』、『經書集句千字文』、『別千字文』、『千字東史』、『變千字文』、『續千字文』、『新訂千字文』の８種がある。それぞれの『千字文』について、著者と著作時期、字数、用字の特徴、周興嗣『千字文』と異なる用字について以下に記述する。

1.1 『萬古千字文』（1666 年）

著者は権應道（1616—1673）、字は士弘、風詠亭と号した。安東の人で、父は徳時、慶尚北道霊泉に居住した。金晦秀は権應道を記念する墓碣銘に以下のように記している。[22]

> “公第一次考上科舉合格生員試、斷念榮利、享受古人的道德、思慕古人的義、在樹下講論和詠詩。”[23]

権應道ははじめて科挙に応試して生員試に合格したが、栄利を断念し、古人の道徳を楽しんで、古人の義を思慕して出家して講論と詩を詠じた。

『萬古千字文』の著作時期は丙午年（1666 年）であり、その子孫が 1965 年に発刊した遺稿集『風詠亭逸稿』第 1 冊「雑著」に収録されている。字数 1000 字のうち重複して使われた字として、干、綱、官、同、謨、無、微、迷、並、參、城、歳、於、傳、從、聚の 16 字種があるから、実際に使われた字は 984 字となる。

内容は陰陽五行説を明らかにし、それによって国家統治における問題点を説明する。「混沌初分」からはじまり、「白鷗間似」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる漢字は 584 種ある。

1.2 『續千字』（1781 年）

著者は南景根、生卒年は未詳、著作として『續千字』と『統海百八詞』が伝わっていることのほかはわからない。[24]

著作時期は 1781 年（正祖 5 年）、安鼎福（1715-1791）[25] の『順菴集』に「續千字跋」がある。字数 1000 字のうち重複して使われる漢字は、蝎、綱、郭、栗、逢、春、虎の 7 種あるから、実際に使われた字数は 993 字となる。

内容は天篇、地篇、人篇の三部に分かれており、人篇においては中国の歴史を叙述し、あわせてかつての隠者・賢人の業績を評価する。「乾坤肇判」からはじまり、「些耶歟兮」でおわる。

周興嗣『千字文』と異なる漢字が 989 字もあり、周興嗣『千字文』に含まれる漢字としては、克、念、無、誠、樂、詠、跡、竹、瞻、泰、弦の 11 字があるにすぎない。このことから著者が周興嗣『千字文』の用字に大いなる異見をもっていたと推測できる。韓国で著述された各種『千字文』の中で、周興嗣『千字文』の用字ともっとも大きく異なる『千字文』である。

1.3 『經書集句千字文』（1800 年）

著者は洪錫謨（1781—1857）、朝鮮後期の文臣で豊山の人、字は敬敷、九華斎と号し、また近窩、陶厓、望西堂、蔔翁、玉灘居士、一両軒、紫閣山人、餐勝子とも号した。著作に『陶厓詩』、『陶厓詩文選』、『賞心録』、『遊燕藁』、『東國歳時記』、『都下歳時紀俗詩』、『遊燕藁』がある。[26]

著作時期は 1800 年、字数 1000 字のうち重複して使われる漢字には恇、念、麥、密、勇、在、田、戚、千、祝、八、辟、兮の 13 種類があるので、実際に使われた漢字は 987 字となる。「天地定位」

からはじまり、「福不眉寿」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は547字ある。

1.4 『別千字文』（1855年）

著者は洪羲俊（1761―1841）、前項に掲げた『經書集句千字文』の著者洪錫謨の父で、はじめ仲心を字としたが後に仲深と改め、熏谷と号した。33歳で文科に及第し、憲宗6年（1839）に崇禄大夫、承政院承旨など内外の主要な要職をあまねく経た。[27]

著作時期は1855年、ソウル大学奎章閣に所藏される『傳舊』11冊中の第4冊に収録されている。

字数1000字のうち重複して使われた字に綱、界、高、穀、共、再、傳、族の8字があるので、実際に使われた字は992字となる。「天地人皇」からはじまり、「惜殉社稷」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は578字。

1.5 『千字東史』（1885年）

著者は尹喜求（1867―1926）、字は周賢、于堂と号す。参議宏善の子。1897年に朝廷に史禮所が設置されると張志淵とともに任官されて『大韓禮典』を編纂、その後参上として『文獻備考』を増修、奎章閣に補せられ『兩朝寶鑑』を編纂した。

日本占領後は総督府の中樞院嘱託として経学院の副提学を兼ね、1916年には張志淵・呉世昌などと『大東詩選』を編纂。[28]

内容は上古史を概論し、続いて新羅史、駕洛国（金官伽耶）、高句麗、百済、高麗の順に叙述し、自らが仕える朝鮮朝の出現でおえる。時代的な潮流に抗して民族的自覚をもって著述した点で高く評価しうる。

字数1000字のうち重複する漢字は加、揚、符、翼、英の5字あるので、実際に使った字は995字となる。「天地之間」からはじまり「永億萬歳」でおわる。四字句の韻文で、詳細に注をつけている。周興嗣『千字文』と異なる漢字は566字。

1.6 『變千字文』（1899年）

著者は趙存榮（1785―?）、字は老泉、鍾山と号した。純祖22年（1822）壬午の年試で生員三等37位として生員となり、学問研究に邁進した。特に詩にすぐれ、経史を基礎としつつ諸家も渉猟したが、朝廷に抜擢されなかったのは時運にあわなかったためと記録される。[29]

著作に『鍾山詩文集』は、子孫の趙琦顯・趙儀顯などが1899年に収集して刊行したもの。

字数は998字で、拜、曰、傳、八、寒の5字が重複するので、実際に使われた字は993字となる。なお文中の「切」は韓国のみに存在する字で、ユニコードに未収、韓国で使われる漢字コードではKC06122。

1.7 『續千字文』（1903年）

著者は田錫雨（1828―1916）、潭陽の人、字は致喜、陽里または襄谷と号す。著者に関する詳

細な記録は未見。その著『陽里文集』が嶺南大学図書館に所蔵される。

字数1000字のうち重複する字は區、卷、佛、象、梁、豪、魂の7字あり、実際に使われた字は993字となる。「混沌肇判」からはじまり、「隙驥須臾」でおわる。

周興嗣『千字文』と異なる用字が991字もあり、非常に多くの文字を使い分けていることが分かる。

1.8 『新訂千字文』(1908年)

著者は李承喬、生卒年未詳、字は蘭谷。1908年に広徳書館が刊行した新式活字本『千字文』のうちの1冊で、実用漢字1000字を集めて編纂した。(30)

形式は韻文4字句250からなり、各漢字の下にハングルで字音と音釈と字義を注記する。字数1000字のうち棠と智が重複するので、実際に使われた字は998字となる。「天地日月」からはじまり、「注意也哉」でおわる。

1.9 『牖蒙千字文』(著作時期未詳)

著者は朴元黙(1834―1911)、朝鮮末期の孝子で、咸陽の人、字は性容、石下と号した。慶尚南道密陽三浪津邑青鶴里で生まれた。著作には『石下先生文集』がある。(31)

字数は1036字で、重複して使われた字は鳥、春の2字だから、実際に使った字は1034字となる。「天地人物」からはじまり、「此皆助者」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は614字ある。

1.10 『啓蒙千字文』(著作時期未詳)

著者は申箕善(1851―1909)、朝鮮末期の文臣、平山の人、字は言汝、また陽園、蘆峰と号した。

1877年に文科丙科に及第、承文院副正字として官職生活を始め、1878年司諫院の正言、1879年弘文館副教理、1881年侍講院文學などを歴任した。開化党の人物と密接な交流関係があって、1884年甲申政変の時に開化党の政府參政、1905年に咸鏡道觀察使、1906年に弘文館學師、1907年掌禮院卿修學院長などを歴任し、同年に閔丙奭・李容稙などとともに大東學会を創立して会長となった。著書に『儒学經緯』がある。(32)

1000字のうち履、偏の2字が重複するので、実際に使われた字数は998字となる。「天開地闢」からはじまり、「誦習無斁」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は506字ある。

2. 日本占領時代の各種『千字文』

日本占領時期に韓国で著述された『千字文』には、『歴代千字文』、『部別千字文』、『圖形千字文』、『新千字文』、『童蒙須讀千字文』、『朝鮮歴史千字文』、『日鮮文新訂類合千字』、『性理千字』、『千字歌』、『新製千字文』、『續千字文』、『大東千字文』、『東天字』の13種類がある。

日本占領時期の1920年代に教育熱が高くなるにつれて教育機関設立運動が展開され、私立学

校と私設学術講習会に対する弾圧を避けて、寺子屋がたくさん設置された。これを契機として韓国の実情にふさわしい『千字文』教材が数多く著述され、教育に使われたが、その時代的な背景として、韓国の歴史にかかわる『千字文』が中心となっている。

2.1 『歴代千字文』(1911 年)

『歴代千字文』の著者は李祥奎(1846—1922)、字は恵山、咸安の人。著書に『讀書隨劄』15 巻がある。[33]

学童らに漢字を教育し、かつ中国の歴史を習得させるための著述で、1911 年に木版本で刊行された。内容は中国の歴史を敍述し、歴代における各界各層の主要人物の事績を批判的な観点によって述べ、勧善懲悪的な方向で訓戒を多く盛りこんでいる。著作の動機について序跋に、周興嗣『千字文』は簡便ではあるが文理が通じないところがあり、かつ教える者にとっても難解であるので、子どもたちが平易に学習できるものを作ったという。『歴代千字文』に加えられた釈音は、20 世紀初期の韓国語が数多く記載され、特に西部慶南地方の方言が反映されていて、その点で国語教育の面からも価値がある著作とされる。[34]

1000 字のうち宮、滕、繹、徽の 4 字が重複するので、実際に使われた字数は 996 字となる。5 字句になっていて、「太極肇剖判」からはじまり、「涙迸下泉流」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 579 字ある。

2.2 『部別千字文』(1913 年)

著者は金琪鴻、生卒年と伝記は未詳。1913 年の著述で、大邱の在田堂書鋪が木版本一冊で刊行した。この本の特徴は語彙をジャンルごとに分類している点にあり、初めの 10 行に「天文地理」「人倫事行」「躬體服飾」「容器算程」と分類体系が記され、そのあとに「天文」や「地理」に関する漢字などが音訓とともに、ジャンルごとに提示される。[35]

1000 字のうち理と膝 2 字が重複するので、実際に使われた字数は 998 字になる。「天文地理」からはじまり、「蟄蠢化生」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 729 字ある。

2.3 『圖形千字文』(1922 年)

著者は高裕相(1889—1962 以後)、1922 年の著作で、匯東書館[36]から刊行されたが、高裕相自身が匯東書館のオーナーであるから、彼が確実な著者であるかどうかはわからない。[37]

匯東書館は 1800 年代末から 1950 年中期頃まで活動した出版社兼書店で、近代期に書籍業を運営した最高の書鋪として知られた。匯東書館の設立者高済弘逝去のあと、息子の高裕相が書籍業を受け継いだ。[38]

本書は書名通り各漢字の左側に字義を表す絵を描いて学童の理解を助けており、絵が非常に精巧である。学童の漢字教育に必要であるとの認識のもとに作られたことが分かる。

字数は 996 字、「一二三四五」からはじまり、「復何為也」でおわる。996 字の中で重複して使

われた漢字は峯、魚、天の 3 字で、実際に使われた字数は 993 字となる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 585 字ある。

2.4 『新千字文』（1924 年）

著者は権輔相（1879―?）、匏軒と号した。1879 年に忠北堤川で生まれた。1924 年の著述で、1925 年に新刊図書として紹介されたところ相当な販売部数をあげ、家庭や寺子屋での教育用に広く普及したと言う。(39)

日帝からの誘惑を退けて独立運動に従事するも、叔父の投獄をきっかけに、日帝の弾圧を避けて中国に亡命した。亡命生活の中で数多くの著述を著したが、故国に送ろうとしていた本を新義州で日本の官憲に奪われ、現在では『新千字文』しか残っていない。

1000 字のうち重複する字は一字もない。「上天下地」からはじまり「龜齡纔顯」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 406 字ある。

2.5 『童蒙須讀千字文』（1925 年）

著者は金泰麟（1869―1956）、字は仁吉、小岡と号した。経学と史学に明るく、16 から 17 歳ですでに郷里で名声を博した。1890 年に父親を失ってからあと家業が没落し、求道にだけ志を抱いた。

甲午改革で科挙が廃止になり、科挙受験の機会がなくなったあと、1897 年には金泰麟のすぐれた学問と資質を生かすために、周辺の人々が援助して臺陽齊書院を立てて、そこで金泰麟の教えを受けることができるようにした。この時に学童らを教えるために作った教材がこの『童蒙須読千字文』である。(40)

1000 字のうち重複して使われるのは商、鳥、湯の 3 字だから、実際に使われた漢字は 997 字となる。「日月星宿」からはじまり、「秔稷粳粘」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 716 字ある。

2.6 『朝鮮歴史千字文』（1928 年）

著者は沈衡鎭（1881―1949）、1928 年に全南光州で刊行。新式活字本による音釈の方式は、現代の漢字音釈と非常によく似ている(41)。各葉に四字二行で本文を大活字で組み、さらに各字に字音と字義の注をつけ、隔句押韻で読解が容易なように工夫し、後ろに説明を加えた。

内容は檀君朝鮮や箕子朝鮮など韓国の歴史と自然に関するもので、三国の創業と歴史を事件別に略述し、さらに高麗史から朝鮮の亡国までを編纂した。(42)

1000 字のうち重複して使われた字は遣、官、納、師、賜、漢、割の 7 字あるから、実際に使われた字数は 991 字になる。「乾坤曠漢」からはじまり、「繁殖永昌」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 586 字ある。

2.7 『日鮮文新訂類合千字文』（1934 年）

著者は金東縉（1885―?）、徳興書林を 1912 年に設立し、解放後も 1950 年代まで運営した。著者に関する詳らかな資料は少ないが、一説では水原で 4 人の兄弟ともに暮らしていたという。1910 年、25 歳の時にソウルに上り、出版社兼書店であった義進社の書記として就職したが、給与が 4 円の貧しい生活であった。1912 年にソウルの典洞（現在の堅志洞）に徳興書林を設立した。(43)

1000 字の中に重複する字は一字もない。「初学文字」からはじまり、「次第經史」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 707 字ある。

2.8 『性理千字文』（1934 年）

著者は南健（1850―1943）、英陽の人、字は性行、魯軒と号した。寧海府元邱洞に生まれ、中年になって英陽郡石保面地境洞に移住した。幼少時には従兄の寧窩南孝源のもとで学び、成長ののちは叔父の時庵南皐の門下で勉学を続けて、朱子や李退渓の書などに通じるようになった。

著書に『魯軒文集』13 冊があり、ほかに遺稿で詩文集である『魯軒集』がある。(44)

この本は性理学の主要概念と儒教の徳目を教えることを、『千字文』の形式を借りて表現した。

1000 字のうち重複する字は一字もない。「一理太極」「二気陰陽」のような 4 字句で構成され、「念茲戒惕」「罔敢怠荒」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 571 字ある。

2.9 『千字歌』（1935 年）

著者は金悳鍊（1869―1929）、金海の人で字は建七、顧軒と号した。慶州山内面内漆里で生まれた。1880 年に父親が子どもの教育に便利なようにと慶尚北道奉化に引っ越し、そこで趙顯翼の門下で学んだ。功名をあげるための勉強を遠ざけ、ただ聖賢の学問にだけ専念した。1902 年に父母の面倒を見るために再び慶州に帰り、薪渓里に暮しながら掛陵里の李能吾などと交遊して経書を講義した。また蒙養斎で弟子らを教育し、蒙養斎学則 19 條を作って遵守するよう指導し、「主一無適」（心を一つの事に集中させ、ほかにそらさないこと。「論語集注」学而篇から）の思想を講義した。

著書に『退書類輯』4 冊、『吉凶書類』、『四七理気辯』、『東史』、『西岳志』4 冊、『千字歌』1 編、『顧軒集』6 冊などがある。(45)

1000 字のうち重複して使われた字が及、憐、母、肥、要、在、或の 7 字あるから、実際に使われた字は 993 字になる。「天尊地卑」からはじまり、「三秀霊芝」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 550 字ある。

2.10 『新製千字文』（1939 年）

著者は邊相轍（1818―1886）、朝鮮末期の儒学者で、字は道寛、鳳棲と号した。初名は邊相熺、黄州の人、全羅南道長城長安里の出身である。

郷試[46]には何回合格したが、会試[47]には失敗し、やがて科挙受験を断念して経史・礼説・天文・地理・律暦・算数・医薬など多くの分野に研鑽を積むことに力をつくした。文集に『鳳棲遺稿』[48]があって、その他注目に値する著述としては1858年（哲宗9）から1886年（高宗23）まで約30年にわたって居住する村のさまざまな事件を記録した『鳳棲日記』がある。

1000字のうち重複して使われた漢字は居、慶、勤、内、大、戴、靡、微、設、矢、息、眼、楊、遠、祝、治、八、晝の18字だから、実際に使った字は981字になる。「天高地厚」からはじまり、「寅正為記」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は563字ある。

2.11 『續千字文』（1940年）

著者は金錬泰、生卒年未詳、金錬泰に関する伝記は見当たらない。1940年の著述。

1000字のうち「鉾」が含まれているが、この字は韓国だけに存在する字で、ユニコードでもコードをあたえられていない。韓国で制定した漢字コードではKC04205。

1000字うち重複して使われる漢字は汲、産、齊、嗟、桶の5字あり、実際に使った字は995字となる。「乾坤闔闢」からはじまり、「掇拾畢了」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は997字あり、基、竹、泰の3字だけが使われた。

2.12 『大東千字文』（1948年）

著者は金均（1888—1978）、字は念斎。日帝の横暴がひどくなり、創氏改名と断髪令を強要されることへの鬱憤をおさえきれず、ついに故郷の村を出て人跡まばらな小地洞に隠れて暮しつつ、後学を指導しながら編纂した。

内容は、儒学が人間として守らなければならない徳とする「三綱五倫」から説きはじめ、樸堤上、梁万春、姜邯賛、李儁など歴代の忠臣や憂国の士を模範として顕彰し、あわせて新羅の崔致遠や薛聡など 朝鮮の性理学者らの系統と学説などを概説した。[49]

また書中には口承で伝えられる教訓や俗言、および先祖から伝わるすぐれた文化遺産や地方ごとの特産物などについて叙述し、末尾に美しい韓国の自然環境を述べている。[50]

字数は999字で、重複して使われた字は無と地の2字だから、実際に使った字は997字となる。「天地覆載」からはじまり、「永譽克終」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は574字ある。

2.13 『東千字』（年代未詳）

著者は金浩直（1874—1953）、安東の人、字は孟集、雨岡・弦斉と号した。1874年7月26日に慶北義城郡で生まれ、乙未事変が起きた時から積極的に義兵活動に参加した。[51]

著作の具体的な時期はわからないが、日本占領期の著作と推定されているので、筆者もこれを日本占領時代の著述に含めた。

内容は、檀君朝鮮から1910年庚戌国恥までの韓国の歴史を通時的に敍述しており、『千字文』を通じて学童に歴史を教えようとする意図が明確に見て取れる。

1000 字のうち重複して使われた字は甘、復、瞻の 3 字で、実際に使った字は 997 字。「若稽檀君」からはじまり、「已矣焉哉」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 568 字ある。

3. 20 世紀中期の各種『千字文』

20 世紀中期に韓国で著述された『千字文』には『새（新）千字』、『新千字』、『史攷千字』、『大東千字』、『姓氏千字』、『一千字文』、『朝鮮歴史千字文』、『新千字文』、『創作新千字文』、『松亭新千字』の 10 種類がある。各種『千字文』の著者と著作時期、字数、用字の特徴、それに周興嗣『千字文』と異なる用字について以下に考察する。

3.1 『새（新）千字』（1952 年）

著者は白南奎、生卒年は未詳、晩学の人で、中央高等学校を終えて、長年にわたって中等教育に従事した。かつてエスペラント運動に参加して、朴勝彬を中心とする朝鮮語研究会 (52) にも関与した。同徳女子高等学校の副校長を経て、南星高等学校校長となる。4･19 革命の前に逝去した。

著作の動機は 1951 年に李承晩大統領からの特命により、初等学校において 1000 字以内で漢字を教えることが決定されたことにある。その教育用 1000 字が審査を経て刊行されたが、その書物は現在見られない。ただ京郷新聞 1952 年 3 月 16 日日付によって、『새（新）千字』が 12 回にわたって連載されたことがわかる。

1000 字のうち同、留、城、始、案、屋の 6 字が重複するので、実際に使われた字数は 994 字となる。「一二三四」からはじまり、「著者切企」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 513 字ある。

3.2 『新千字』（1955 年）

著者は尹石重（1911―2003）、字は石童、著作に『尹石重童謡集』（1932）、『잃어버린 댕기（無くしたリボン）』（1933）、『어깨동무（肩組み）』（1940）、『날아라 새들아（飛べ！鳥たち）』（1983）がある。

『新千字』は教育用漢字 1000 字を四字句で配列し、古代の『千字文』の形式にならって、漢字を使って字義と字音を注記した。「教育部選定の常用漢字で尹石重が編んだ『新千字』」という文句で新聞に広告が掲載された。(53)

全文は内容の分類が明確でなく、叙述の流れも順調ではない。例えば「喜楽悲哀」と「加減乗除」が対句とされている。字数は 999 字で、重複して使われた字は可、帶、詩、日、祖の 5 字だから、実際に使った字は 994 字となる。「父母兄弟」からはじまり、「其亦重荷」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 511 字ある。

3.3 『史攷千字』（1956 年）

著者は金煥昌（1910―?）、嶺南の人だが故郷は明らかでなく、子孫もなく、終生独身で暮らし

た。『史攷千字』は書家の申河均が著した『平山千字文書集』[54]に収録されているが、原著がどのような形態であったかはわからず、注がないと理解できない部分が多い。

内容は檀君朝鮮と箕子朝鮮から三国史、高麗史、近世までを敍述し、とりわけ朝鮮王朝の官職と文化面、壬辰倭乱と国軍敗退の過程に詳しく、末尾には日本撤退のあとの祖国に対する祝福が述べられている。[55]

1000字のうち流、吏、士、延、玉、齊の6字が重複するので、実際に使われた字数は994字となる。「亞洲東幅」からはじまり、「促難摭筆」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は575字ある。

3.4 『大東千字』(1960年)

著者は李圭昶(1913—2005)、1948年に初代副統領に招かれた李始栄(1869—1953)の子弟で、国会議員に出馬し、また慶熙大学校の前身である新興大学の運営に関与したこともある。文中の四字句から漢字と漢文成句の原理が類推でき、内容にも一貫性があって、正確に押韻した優秀な著述と評価される。

内容は天地造化を略述し、人間の身体構造と人倫の大綱を述べる。自然の活用を強調し、日常的な事項を列挙しており、韓国の歴史については檀君から亡国と日帝の占領までを敍述し、建国と後進に対する激励で結んでいる。[56]

1000字のうち綿、旋、玉、牛、風の5字が重複するので、実際に使われた字数は995字となる。「天地一二」からはじまり、「匡救垂策」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は493字ある。

3.5 『姓氏千字』(1981年)

著者は李固善(生卒年未詳)、心堂と号した。終生を国史研究にささげ、檀君聖帝の歴代在位の年数と業績など、世間からはあまり注目されない事実を探求した。[57]

歴代わずか記録だけに見える姓氏まですべて収録したが、一般的な識字教材とは認定されない。字数は957字で、重複して使われた字は、干、葛、袷、高、谷、公、工、恭、空、霍、歐、宮、鬼、那、南、段、大、都、獨、東、羅、卵、良、麗、連、令、禮、龍、律、馬、明、牟、木、文、門、彌、方、甫、傅、扶、似、司、沙、西、石、先、鮮、成、素、孫、愼、新、室、牙、顔、陽、御、餘、王、容、于、宇、牛、羽、熊、位、有、乙、劦、鼎、諸、齊、租、仲、曾、支、眞、拓、楚、夏、漢、赫、虎、皇、侯、黒、羲の87字だから、実際に使った字は870字となる。「天開甲子」からはじまり、「新羅万姓」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は533字ある。

3.6 『一千字文』(1988年)

著者は柳正基(1910—?)、全州の人、字は唯中、明谷と号した。安東出身の教育者であり、同時に学者。名家の出身で、かつて日本に留学して大学を卒業した。光復後に帰国して大学教授として人材養成に力をつくしたが、ハングル専用政策に反対して罷免された。忠南大学校大学院

長に任じられた。

著書に『東洋思想辭典』、『東洋思想論集』、『四書三經譯解』、『孟子新講』、『啓蒙要傳』、『易經新講』がある。[58]

形式は四字成句で全12課、課ごとに4句96字ずつを割当て、タイトルを掲げて目的を明確にしている。

字数は1148字で、重複して使われた字は干、望、聞、微、似、歳、輸、實、若、牛、日、借、祝、就の14字だから、実際に使った字は1134字となる。「天尊地卑」からはじまり、「焉望幸榮」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は596字ある。

3.7 『朝鮮歴史千字文』(1989年)

著者は嚴受東(1905—2003)、朝鮮の最後の儒学者といわれる。字は性率、明渉と号した。乙巳勒約[59]で国権が失われた1905年3月10日に、全羅南道南谷城郡立面金山里で生まれた。9歳で学問の道に入って李起琳に師事し、『孟子』を学んで徳業を成就し、恩師の娘を妻とした。21歳で金山に寺子屋を開設して後学を指導したが、実際には民族意識を自覚させるための啓蒙運動であった。[60]

著作に『遺稿集』4冊、『四書三経』、『諺解本』35本と日記がある。

『朝鮮歴史千字文』は嚴受東が寺子屋で教育するために編纂した書で、著者みずからが著した『童蒙讀本』に収録されている。内容は当時の親日的な動向を改めるために、沈衡鎭の『朝鮮歴史千字文』をふまえつつ、朝鮮の歴史を1000字で解説するものである。

1000字のうち競、氣、旅、民、賜、師、於、賊の8字が重複するので、実際に使われた字数は992字となる。「乾坤肇闢」からはじまり、「牙會永彰」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は595字ある。

3.8 『新千字文』(1992年)

著者は文松岩、生卒年未詳。著者に関する資料は未見。韓国国立中央図書館に所蔵されている。

1000字のうち重複する字は一字もない。「天日月明」からはじまり「松岩著述」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は577字ある。

3.9 『創作新千字文』(1994年)

著者は李英植、生卒年未詳、晩泉と号した。晩泉書芸研究院の院長で、書家でもある。

この本の特徴は使われた語彙が故事成語に限定されず、教育部が選定した1800種の漢字の中から、韓国の実情を理解するために必要な漢字で四字熟語を新しく編集し、書道学習者が習書できるようにと大きい字で掲載したことにある。

1000字のうち利、物、集、清の4字が重複するので、実際に使われた字数は996字となる。「三五七九」からはじまり、「最終開拓」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は525字ある。

3.10 『松亭新千字』（著作時期未詳）

著者は金赫済（1903—1970）、松亭と号した。出版業に従事し、1923年ソウルに明文堂を設立した。現在はその息子が引き継いで出版社を経営中である。(61)

著書に『天機大要』、『一年身數秘訣』、『松亭秘結』、『名字吉凶自解法』、『解夢要結』など数十冊の易学書がある。

内容は天地と韓国の天恵的環境を讃美し、遵法精神と時局に関する事象を列挙し、また日常的な遵則や健康と身辺に関する訓戒を敍述している。

筆者は『松亭新千字』の著述年代を1950 − 1970年間と推定する。(62)

1000字のうち重複する字は一字もない。「天地一月」からはじまり「前途多望」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は532字ある。

4. 20世紀後期の各種『千字文』

20世紀後期に韓国で著述された『千字文』には『信千字文』、『韓國史千字文』、『槿域千字文』の3種類がある。各種『千字文』の著者と著作時期、字数、用字の特徴、それに周興嗣『千字文』と異なる用字について以下に考察する。

4.1 『信千字文』（2005年）

著者は金沂宇（1941—）。1941年全南康津郡薪田面で農夫の長子として生まれ、ソウル神学大学と同大学牧会大学院を卒業。1978年牧師安受を受けた後、2001年3月米国Louisiana Baptist Universityで名誉神学博士学位を取得した。ソウルにある往十里聖潔教会の担当牧師を歴任。著作に『Korinthos前書講解』、『Korinthos後書講解』、『福音書釋義』、『幸福一信頼生活』がある。

『信千字文』の著作時期は2004年11月、出版発行日は2005年1月。

内容はキリスト教の経典である聖書を基礎として、500字、250句、125節で構成されている。句と節を理解すれば、聖書全体の意味が習得できるようにとの工夫がされている。一般的な生活言語と教訓をキリスト教的に解説し、各字の下に関連語を挿入し、広範囲な知識を得るようにしている。本文の句中には漢文の語法に合わない部分も多数ある。著者は編著において『新出国語大辞典』と『エッセンス玉篇』を参考にしたという。(63)

1000字のうち虐の1字が重複するので、実際に使われた字数は999字となる。

「天地創造」からはじまり、「沙礫樓閣」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は560字ある。

4.2 『韓國史千字文』（2006年）

著者は韓晶周（1966—）、1966年全南高興で生まれ、光州石山高等学校、東国大学校史学科を卒業した。10年余りにわたって歴史と古典に対する研究活動をおこない、現在は「古典研究会俟巖」の代表として、歴史と古典の大衆化のために多様な活動をおこなっている。

内容は古朝鮮から断代史までを通時的に扱っているが、単なる通史ではなく、著者独自にテー

マと故事を選定し、それを中心として韓国の歴史を詳しく記述している。著者の意図は韓国の神話と歴史、伝承、及び歴史上の人物について興味深く接することができるようにすることで、それらを新しい解釈で配置している。(64)

1000 字のうち樓、神の 2 字が重複するので、実際に使われた字数は 998 字となる。

「桓雄降壇」からはじまり、「橋凡反分」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 576 字ある。

4.3 『槿域千字文』(2007 年)

著者は朴永信 (1957―)、肅啓と号した。著作の動機は現在の韓国の実情に照らして、悠久の歴史と文化の優秀性を兼ね備えた国家としての正当性を高めるための教材を作らなければならないという信念にあり、天文と自然、そして人文社会などの面においてもっとも基礎的ながら使用頻度が高い漢字を選択して、初学児童らが学習するのに適切な 4 字句を集め、もっぱら韓国に関する記述によって編集した。(65)

1000 字のうち重複する字は一字もない。「天地間人」からはじまり「務則得志」でおわる。周興嗣『千字文』と異なる用字は 505 字ある。

Ⅳ. 結　論

周興嗣が著した『千字文』は、韓国や日本に伝わってからあと、それぞれの国に非常に大きな影響をあたえてきた。そして韓国ではこの伝播過程の中で、韓国の実情にふさわしいようにとの目的のもとに、数多くの新しい『千字文』が作られた。

本論文で筆者は韓国で著述された『千字文』36 種を収集して時代順に分類し、またそれぞれについて周興嗣『千字文』と異なる用字を抽出し、検討した。さらに用字の使われ方を詳らかに把握するために、字数、字種、重複字をも調査した。その調査過程で、現在の韓国における常用漢字との関係を考察するために、常用漢字 1800 字と各種の韓国『千字文』の用字を比較する作業もおこなった。

筆者が収集した韓国の『千字文』には、朝鮮時代『千字文』10 種、日本占領期『千字文』13 種、20 世紀中期『千字文』10 種、21 世紀『千字文』3 種がある。

朝鮮時代の韓国で著述された『千字文』には、『萬古千字文』(1666)、『續千字』(1781)、『經書集句千字文』(1800)、『別千字文』(1855)、『千字東史』(1885)、『變千字文』(1899)、『續千字文』(1903)、『新訂千字文』(1908)、『牖蒙千字文』(年代未詳)、『啓蒙千字文』(年代未詳) の 10 種類がある。

	書名	周興嗣『千字文』と異なる用字数	常用漢字1800に含まれる用字数	字種	重複字	字数
1	萬古千字文	584	671	984	16	1000
2	續千字	989	435	993	7	1000
3	經書集句千字文	547	637	987	13	1000
4	別千字文	578	614	992	8	1000
5	千字東史	566	685	995	5	1000
6	變千字文	97	721	993	5	998
7	續千字文	991	472	993	7	1000
8	新訂千字文	591	686	998	2	1000
9	牖蒙千字文	614	663	1034	2	1036
10	啓蒙千字文	506	748	998	2	1000

10種のうちの8種はいずれも字数がオリジナルの『千字文』と同じく1000字ちょうどであり、『變千字文』(1899)、『牖蒙千字文』(年代未詳)は字数がそれぞれ998字と1036字で、1000字とは若干の過不足がある。このように80%の『千字文』が字数を1000字ちょうどにしていることは、あきらかにオリジナルの『千字文』の特徴をそのまま受け継ごうとしていることにほかならない。

字種は重複字と深くかかわっており、周興嗣『千字文』の字種は「絜」字が重複しているので、実際に使われた字は999字となっている。1000種類の漢字で意味のある文章を作るためには、文脈を整えるためにどうしても文字を重複して使うことが避けがたいが、朝鮮時代の著作では、10字以上の重複字があるもの10種のうちの2種にすぎず、80%の著作が重複字を避けて著述されている。そこに韓国古代の文化人の大いなる努力と才能を感じ取ることができるだろう。

用字の面で、周興嗣『千字文』と異なる漢字をもっとも多く使ったのは『續千字文』(1903)と『續千字』(1781)で、異なる用字の字数がそれぞれ991字(99.1%)、989字(98.9%)となっている。オリジナルの1000字のうちの900字あまりも漢字を換えるという行為から考えれば、それらが周興嗣『千字文』から脱皮して、新しい『千字文』を作ろうとの目的で編纂されたものであることが明白である。

これと反対に『變千字文』(1899)は周興嗣『千字文』のうちの97字だけ用字を変えて著述したもので、計36種の韓国『千字文』の中で用字を換えたのがもっとも少ない『千字文』であった。

韓国の常用漢字1800字との比較では、『續千字』(1781)が常用漢字のうち435字を含むのみで、朝鮮時代の韓国『千字文』の中では常用漢字収録数がもっとも少なく、逆にもっとも多いのは『啓蒙千字文』(年代未詳)で、そこには常用漢字1800字のうち721字が含まれている。まとめれば、もっとも少ないものでは約24%、もっとも多いのでは40%の常用漢字を含んでいることになる。

日本占領時期に韓国で著述された『千字文』には、『歴代千字文』(1911)、『部別千字文』(1913)、『圖形千字文』(1922)、『新千字文』(1924)、『童蒙須讀千字文』(1925)、『朝鮮歴史千字文』(1928)、『日鮮文新訂類合千字』(1934)、『性理千字文』(1934)、『千字歌』(1935)、『新製千字文』(1939)、『續千字文』(1940)、『大東千字文』(1948)、『東天字』(年代未詳)の13種類がある。

	書名	周興嗣『千字文』と異なる用字数	常用漢字 1800 に含まれる用字数	字種	重複字	字数
1	歴代千字文	579	667	996	4	1000
2	部別千字文	729	449	998	2	1000
3	圖形千字文	585	656	993	3	996
4	新千字文	406	916	1000	0	1000
5	童蒙須讀千字文	716	476	997	3	1000
6	朝鮮歴史千字文	586	698	991	7	1000
7	日鮮文新訂類合千字	707	474	1000	0	1000
8	性理千字文	571	642	1000	0	1000
9	千字歌	550	700	993	7	1000
10	新製千字文	563	691	981	18	1000
11	續千字文	997	378	995	5	1000
12	大東千字文	574	749	997	2	999
13	東天字	568	679	997	3	1000

日本占領時期の『千字文』13 種の中で字数が 1000 字に一致しないものは『圖形千字文』(1922) と『續千字文』(1940) の 2 種だけである。重複字については、一字も重複せずに作った著作が 3 種ある。それらはまさに 1000 字ちょうどを使って作った著作であり、著者が 1000 種類の漢字を整えて文章にまとめる作業に大いに苦労したことがしのばれる。

周興嗣『千字文』との用字の相違がもっとも多いのは『續千字文』(1940) で、そこではわずか 3 字だけ周興嗣『千字文』の用字と重なり、それ以外の 997 字はすべてオリジナルに含まれていない漢字である。筆者が収集した韓国『千字文』36 種の中で、用字の異なりがもっとも多いのはこれである。

常用漢字 1800 字との比較では、『新千字文』が常用漢字 1800 字のうち 916 字を含んでおり、これがもっとも多かった。逆にもっとも少ないのは『續千字文』で、1800 字のうち 378 字が含まれるのみである。まとめれば一番少ないのが 21%、もっとも多いのは 50.8% であり、このことから日本占領時期になって『千字文』に使われた漢字が常用漢字をますます多く含む傾向にあることが見て取れる。もちろんこの時期にはまだ常用漢字は制定されていないが、どのくらいの漢字が常用漢字となるべきか、その大まかな認識が自然に形成されていく時期でなかっただろうかと推測される。

日本占領時期の『千字文』が載せている内容には、韓国の歴史に関する記述を盛りこもうとするものがたくさんある。これは朝鮮時代の著作とは確実に差異があり、日本占領という事態が民族意識の高揚に作用した結果、『千字文』の編纂に非常に大きな影響をあたえたと考えられる。

20 世紀中期に韓国で著述された『千字文』には、『새千字』(1952)、『新千字』(1955)、『史攷千字』(1956)、『大東千字』(1960)、『姓氏千字』(1981)、『一千字文』(1988)、『朝鮮歴史千字文』(1989)、『新千字文』(1992)、『創作新千字文』(1994)、『松亭新千字』(年代未詳) の 10 種類がある。

	書名	周興嗣『千字文』と異なる用字数	常用漢字1800に含まれる用字数	字種	重複字	字数
1	새千字	513	950	994	6	1000
2	新千字	511	955	994	5	999
3	史攷千文	575	666	994	6	1000
4	大東千字	493	817	995	5	1000
5	姓氏千字	533	667	870	87	957
6	一千字文	596	1018	1134	14	1148
7	朝鮮歴史千字文	595	698	992	8	1000
8	新千字文	577	760	1000	0	1000
9	創作新千字文	525	940	996	4	1000
10	松亭新千字文	532	874	1000	0	1000

10種の中で字数が1000字に満たないものは『新千字』(1955)と『姓氏千字』(1981)の2種で、字数が1000字を超過するものは『一千字文』(1988)で、そこには1148字ある。残りの7種はいずれも1000字ちょうどに合わせて著述されている。

周興嗣『千字文』と用字がもっとも多く異なるものは『一千字文』(1988)で、596字が異なり、逆に用字の相違がもっとも小さなものは『大東千字』で、493字が異なっている。朝鮮時代と日本占領時期において周興嗣『千字文』と用字面での相違が最大のものと最小のものの差が500字以上あったから、20世紀中期の『千字文』ではその差異が100字程度狭められたことが分かる。

常用漢字1800字との比較では『一千字文』の1018字が一番多く含んでおり、『史攷千文』が666字ともっとも少なかった。最大で56.5%、最小で33%の包含率である。20世紀中期の1951年に常用漢字1000字が初めて制定され、それが1957年に300字を加えた1300字に、さらに1972年に500字を追加した1800字として制定された。この時期に著述されたものは、このような流れをうけて、朝鮮時代や日本占領時期のものとちがって、できるだけ多くの常用漢字を含めようとしたものと推測される。

21世紀に韓国で著述された『千字文』には『信千字文』(2005)、『韓國史千字文』(2006)、『槿域千字文』(2007)の3種がある。

	書名	周興嗣『千字文』と異なる用字数	常用漢字1800に含まれる用字数	字種	重複字	字数
1	信千字文	560	831	999	1	1000
2	韓國史千字文	576	760	998	2	1000
3	槿域千字文	505	913	1000	0	1000

3種はいずれも字数が1000字で、周興嗣『千字文』とは500余字の用字の異なりがある。常用漢字との比較では、もっとも少ないものでは760字が含まれ、もっとも多いものでは913字が含まれている。21世紀の『千字文』も、20世紀中期のものに続いて、常用漢字が『千字文』に数多く収録されていることがわかる。

また過去にはない珍しい特徴として、宗教に関する『千字文』が著作されていることがあげられる。以前には歴史と人の本性を中心に記述した『千字文』教材はあったが、21世紀では伝統

的かつ定型的な識字教育教材から脱皮して、新しい時代における教育教材への役割を果たそうとするものであることが分かる。

今回おこなった36種の『千字文』をデータベースの構築によって、各種『千字文』での用字の分析がきわめて容易になったし、同時に迅速かつ正確な作業が可能となった。またデータベースを構築することにより、かつては亡失の危険すらあった過去の資料を恒久的に残すことが可能ともなった。またデータベースの活用によって各種資料の比較研究が容易にもなり、今後の韓国でも著述され続けていくであろう未来の『千字文』に関する研究がもっと活発におこなわれることも期待される。

なお筆者が収集したものの本論文に含んでいないものとして、金靈の『歴代千字文』(1911)、慶北大学図書館所蔵の『詠史千字文』、個人所蔵の『類聚千字文』があり、その外にも韓国での著作ではあるが韓国人ではない宣教師が著した『牖蒙千字』と、まだ連載が終わっていない『魔法千字文』などがある。それ以外にもまだ発見できていない韓国の『千字文』が存在する可能性も大いに考えられる。如上の観点から、筆者は今後も未知の『千字文』の探索を継続し、用字の分析だけでなく、書物の内容と文化面における意義などについて、より深い研究を進めることを今後の課題としたい。

注

(1) 『魔法千字文』は韓国 book21 出版社から出版され、韓国 MBC で 2011 月 9 月 5 日から放送。

(2) 『太極千字文』はアニメーション、韓国 KBS と日本東映アニメーションの共同製作で、2009 年 4 月 14 日から放映された。

(3) 李勳鍾「我が国で成立した千字文型教材の探究」『建國大學學術集』第 27 集 (1983)

(4) 「教育上から見た千字文の研究」『日本学士院紀要』第 11 巻第 3 号 (1953) p.138、『中外経緯伝第一』(前掲本 p23)

(5) 林東錫「千字文の源流内容及び韓国での発展状況考察」『中国語文学論集』第 56 號 (2009)

(6) 鍾繇『千字文』は『三希堂法帖』に王羲之の書によって収録されている。『二儀日月千字文』と呼ばれることもある。

(7) 『訓蒙字會』は崔世珍が子供たちの漢字学習のために著述した本。1527 年 (中宗 22) 刊行のあと何回か刊行された。上中下 3 巻、各巻に 1,120 字ずつ、計 3,360 字を収録。漢字の配列は、上巻に天文以下 16 文、中巻に人類以下 16 文に主に実字を収録し、下巻には雑語として半実半虚字を収録。李基文「訓蒙字會研究」『韓國文化研究叢書 5』、ソウル大學校韓國文化研究所 (1971)

(8) 『訓蒙字會』(影印本)、檀國大學校出版部 (1995)

(9) 林東錫、「千字文の源流内容及び韓国での発展状況考察」『中国語文学論集』第 56 號 (2009)

(10) 「慶尙道監司河演進《入學圖說》、《易》、《詩》、《春秋》、《中庸》、《大學》、《論語》、《孝行錄》、篆書《千字文》、大字《千字文》, 分賜于成均、校書館、四部學堂。」≪朝鮮王朝實錄≫ < 世宗 卷三十、7 年 11 月 2 日 > 影印本, 二册, 698 頁。

(11) 安美璟『千字文刊印本研究』以會文化社 (2005)

(12) 『新増類合』の著者は劉希春。著作時期は 1576 年、朝鮮時代の漢字学習入門書で、活字本が現在 ソウ

ル韓国學中央研究院に所蔵されている。

(13) 『童蒙先習』は朝鮮時代の書堂で使用された。著者は朴世茂、現在ソウル韓国学中央研究院に所蔵されている。『千字文』学習後に学童らが学ぶ初級教材で、内容は父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信の「五倫」と、「三皇五帝」から明までの歴史と朝鮮史を記述している。

(14) 『擊蒙要訣』は 1577 年（宣祖 10）に李珥が編纂した漢字初級入門書。

(15) 『三字經』『百家姓』『千字文』などの識字教科書の総称。

(16) 柳志弘「日帝時代 漢字教材『東千字』研究」高麗大学、碩士学位論文（2007）

(17) 韓石峯（1543-1605）は韓濩、字は石峯、清沙また景洪と号した。朝鮮中期の書家。開城で生まれ、王羲之と顔真卿の筆法を研究した。

(18) 「麻提督求本國書迹 , 以副閣老、尙書及宣摠兵之求 , 上曰 :“ 李瑀書 , 不可示華人 , 只令（韓護）〔韓濩〕書送。”」『朝鮮王朝實錄』「宣祖卷 98、31 年（1598）3 月 9 日」影印本 23 册 398 頁。

(19) 鄭羽洛「日帝强占期『東千字』類著述方向及意义」『韓國思想과文化』第 44 集（2005）

(20) 安美璟『千字文刊印本研究』以會文化社（2005）

(21) 洪允杓「我が国の語彙資料文献について」『第 5 次南北国際学術会議論文集 : 民族語語彙構成の変化と統一的発展』国立国語研究院（2005）

(22) 韓國學中央研究院、韓國歷代人物情報系統、http://people.aks.ac.kr/

(23) 『嶺南文集解題』嶺南大學校民族文化研究所（1988）pp.931-932

(24) 李勳鍾「我が国で成立した千字文型教材の探究」『建國大學學術集』第 27 集（1983）

(25) 安鼎福（1715-1791）字は百順、順菴、漢山病隱、虞夷子、橡軒号した。 著書は『東史綱目』、『順菴集』、『家禮集解』。國立國語院、http://www.korean.go.kr/

(26) 韓國學中央研究院、韓國歷代人物情報系統、http://people.aks.ac.kr/

(27) 豊山洪氏宗親會、http://cafe.daum.net/PShong.

(28) 韓國民族文化大百科（2010）http://terms.naver.com/entry.nhn?docId=540481。

(29) 韓國民族文化大百科（2010）http://terms.naver.com/entry.nhn?docId=549611。

(30) 洪允杓「我が国の語彙資料文献について」『第 5 次南北国際学術会議論文集 : 民族語語彙構成の変化と統一的発展』国立国語研究院（2005）

(31) 韓國學中央研究院、歷代人物綜合系統、http://people.aks.ac.kr/

(32) 韓國學中央研究院、歷代人物綜合系統、http://people.aks.ac.kr/

(33) 申景澈「歷代千字文研究」『国語国文学』第 95 集（1986）

(34) 洪允杓「我が国の語彙資料文献について」『第 5 次南北国際学術会議論文集 : 民族語語彙構成の変化と統一的発展』国立国語研究院（2005）

(35) 白斗鉉「愛国志士金泰麟編纂的《童蒙須読千字文》研究」『語文学』第 95 集（2007）

(36) 1897 年高裕相がソウル広橋近くに建てた後、1950 年代中期まで運営された。出版のみならず、書店と文具店も兼ねていた。李海朝の『華盛頓伝』をはじめ韓国最初のベストセラーである池錫永の『字典釈要』、韓竜雲の『様の沈黙』、李光洙の『無情』など計 201 種の出版物を刊行した。古代小説・伝奇・翻訳物はもちろん、産業技術分野や医薬学分野の書籍出版にも積極的だった。古代小説を除いたすべての出版物に印税を支払った最初の出版社でもある。

(37) 洪允杓「我が国の語彙資料文献に対して」『第 5 次南北国際学術会議論文集 : 民族語語彙構成の変化と統一的発展』国立国語研究院（2005）

(38) 「毎日申報」1930 年 5 月 1 日。
방효순「日帝時代民間書籍発行活動の構造的特性に関する研究」梨花女子大学（2001）

(39) 「東亜日報」1958 年 6 月 29 日。

(40) 유영옥「日帝下小岡金泰麟 ≪童蒙須讀千字文≫分析」『東洋漢文學研究』第 23 集（2006）
(41) 洪允杓「我が国の語彙資料文献に対して」『第 5 次南北国際学術会議論文集 : 民族語語彙構成の変化と統一的発展』国立国語研究院（2005）
(42) 정욱재「日帝强占期沈衡鎭《朝鮮歷史千字文》研究」『藏書閣』第 22 集（2009）
(43) 방효순「對日帝時代民間書籍發行活動構造的特性研究」博士論文、梨花女大（2001）
(44) 白斗鉉「愛国志士金泰麟編纂的《童蒙須読千字文》究」『語文学』第 95 集（2007）
(45) 韓国学中央研究院　韓国歴代人物情報システム http://people.aks.ac.kr/。
(46) 朝鮮時代に地方で実施した最初の試験。この試験に合格した者がソウルで実施される覆試に応じることができる。
(47) 覆試を指す。国子監における試験。
(48) 朝鮮末期の学者邊相轍の詩文集。1975 年邊昇基などが編輯刊行。巻頭に李圭憲の序文と羅鉀基の跋文がある。巻 1 に詩、巻 2 に書雑著論序銘祝文、附録に万事・祭文・墓表・行状・墓碣銘・跋などが収録されている。この本は 19 世紀後半の保守的な儒学者の精神世界の一面を示す資料でもある。国立中央図書館所蔵。
(49) 이광호 [譯]『大東千字文』푸른 숲（1994）
(50) 柳志弘「日帝時代 漢字教材『東千字』研究」高麗大学、碩士学位論文（2007）
(51) 鄭羽洛「日帝强占期『東千字』著述及意义」『东洋汉文学研』、第 22 集（2006）pp.285―336
(52) 朝鮮語研究会は 1931 年に朴勝彬が国語学研究とハングル綴字法整理を目的に組織した学術団体。
(53)「東亜日報」、1955 年 5 月 20 日。
(54) 申河均著、三和出版　1974 年 2 月 20 日。
(55) 李勳鍾「我が国で成立した千字文型教材の探究」『建國大學學術集』第 27 集（1983）
(56) 李勳鍾「我が国で成立した千字文型教材の探究」『建國大學學術集』第 27 集（1983）
(57) 李勳鍾「我が国で成立した千字文型教材の探究」『建國大學學術集』第 27 集（1983）
(58) デジタル安東文化大全、http://andong.grandculture.net/
(59) 1905 年（明治 38）11 月 17 日に日本と韓国が締結した第二次日韓協約のこと。乙巳勒約とは乙巳の年に大日本帝国からの強制によって結ばれた条約との意。
(60) 朴慧梵『歴史千字文』博而精（2005）
(61) 明文堂のホームページ、http://www.myungmundang.net/
(62) 明文堂のホームページ、http://www.myungmundang.net/
(63) 金沂宇『信千字文』の緒言（2005）
(64) 韓晶周『韓國史千字文』（2006）　p.6
(65) 朴永信『槿域千字文』の緒言（2007）